



3. キャリアの形成


製織技術者として一步一步地歩を固める

藤高に入社して10年が経った頃、豊田一也氏は、1970年3月に今治市出身で保母をしていた啓子氏と結婚し所帯を持った。そして、2人の女の子に恵まれた。所帯を持ち仕事にますます精が出る豊田氏は、1975年10月、32歳のときに難関の国家技能検定（タオルジャカード織機調整作業）1級を取得した。技術の進歩は日進月歩であり、豊田氏の切磋琢磨はその後もつづく。

藤高では、時代の経過とともに設備が新しくなり、自動織機から革新織機への時代を迎えた。革新織機の本格的導入の契機となったのは、1980年代における日本のDCブランド  やヨーロッパのハイファッションブランドの流行である。従来、ブランドのロゴはシンプルなものであり、タオル地に織り込む際に1色の緯糸の装備で十分であった。しかし、高級イメージを持つブランドのロゴは複雑で、少なくとも2、3色の緯糸の装備を必要とした。そこで、藤高では思い切ってドイツ製の革新織機を導入し、ジャカードとドビーの両方に使えるように特殊な改造を施し、大きな設備投資をおこなった。


藤高の工場に最初に導入された革新織機は、レピア織機である。藤高では、高級ブランドの名入れ用のみならず、多様なデザインのタオルづくりを目指していたため、比較的安定して多色の緯糸でタオル製織ができるレピア織機を主力として設備を整えた。レピア織機に備え付けられたジャカード機には、エンドレスカード（厚紙を無端状に連結した積層紙）が使用された。エンドレスカードの紋紙彫機は自社に設置され、必要時にいつでもエンドレスカードを作成できた。

レピア織機が導入される以前は、紋紙を使わずフロッピーを使ってデータを制御する佐和染織工芸（株）  製のダイレクトジャカ


ード機が試織部の工場に導入され、同時にジャカード機のデータを作成するCADシステムも設置され、自社でCGS  を作成できるようにしていた。おかげで、新しい織物を考案すると自分でフロッピーを作成して製織できたため、以前のように紋工所に依頼する必要がなく、自由に織物組織の研究ができるようになった。

レピア織機の採用によってエンドレスカードに代替するが、エンドレスカードの作成は前述のように藤高では自社でおこなっていた。エンドレスカードを使ったジャカード機を活用して上系(パイル系)も下系もジャカードで吊る総吊りを考案し、多色の緯系を使いボーダー部分に複雑なブランドロゴや模様を入れたタオルをつくったり、多重ガーゼ織りやパイルガーゼ織りなど変化に富むタオルをつくったり、他社に先駆けて多色ボーダーの紋織タオルを生産できた。

その後、藤高では、スイス製の高速革新織機の導入に合わせて電子ジャカード機の導入を決め、さらなる合理化を推し進めた。電子ジャカード機は、電子信号によって経系の上がり下がり制御でき、フロッピーやコンピュータなどのメディアから直接ジャカード機にデータが出力されるのが特徴である。

このように、普通織機から自動織機、革新織機へと時代とともに技術が大きく変わっても、豊田氏は新しい技術に応じて現状に満足することなく、日々新しいスキルを身に付けていった。製品開発のヒントは日々の活動のなかから生まれた。全国の織物産地への視察やJFW ジャパンクリエーション  への参加などをおして、タオル織機の無限の可能性を確信し、アパレル生地を生産や異素材(ウールや麻など)を使ったタオル生産にもチャレンジしたこともある。かつて豊田氏が生産したアパレル生地は、日本のDCブランドを牽引したコムデギャルソンのパリコレに採用された。

アパレル生地を生産は面白味があったが、手間暇かけて期待以上の生地が製織できても生地だけの値段しかつかない。その生地を使って有名デザイナーがドレスをつくると1着30万円に跳ね上がる。例えば、「メーター2,500円で買いますよと打診されても、少量・

小ロットでしか売れないので、タオルケットを織っている方がだいぶ苦労せんでも織れる」というわけである。タオルのように完成品まで自社で生産できれば多少の利益は見込めるが、アパレル生地の場合はデザイナーによるデザインがすべての付加価値を決めるため、採算度外視の覚悟で取り組まなければならない領域である。「だけど勉強にはなりました」と豊田氏が言うように、この経験からタオルの原料となる綿糸の開発に乗り出した。藤高にとってはあまりメリットのない試みであったが、中空糸の「スピンエアー」 という綿糸を倉敷紡績（株）とタッグを組んで開発した。綿糸開発もさまざまな原因で何度も失敗し試行錯誤の連続であったが、タオル製品のバリエーションを増やすうえで貴重な知識を得た。豊田氏は、スピンエアーの失敗原因からヒントを得て無撚糸シャーリング（蒸しシャーリング）を編み出し、模様が浮き上がるという従来にない特徴的なタオルを製品化しヒットさせた。

こうした数多くの経験をへて培った豊田氏の技術は、社内のみならず外部からも評価されるようになった。まず1993年11月に愛媛県技能士会から会長表彰（優秀技能者）を受け、技術者として確実に地歩を固めていった。ついで、2004年12月に「ジャパン・クリエーション2005テキスタイルコンテスト」で入選を果たした。さらに、2005年に世界初のフルカラーのタオル「五彩織り」を開発（特許出願番号：2005062962）し、この作品は2012年に「ものづくり日本大賞 経済産業大臣賞」を受賞した。



2005年から経済産業省、国土交通省、厚生労働省、文部科学省によって主催され、「ものづくり」に携わる各世代の人材のなかで、とりわけ優秀と認められた人材を顕彰している

現役時代に携わった数々のサンプルを前に
解説する豊田一也氏



藤高本社に展示してある豊田一也氏による、ゴッホ「ドービニーの庭」(左上)、セザンヌ「リンゴとオレンジのある静物」(右上)、モネ「睡蓮」(左下)を模したタオル



タオル地をアップで見ると細かい織りで表現されているのがわかる



タオル織機を使ったアパレル生地



平日は仕事詰めだったが、休みの日は藤高の「Sekaituru」と名付けられたチームで軟式野球をして交流を深め、また地元のソフトボールのチーム「Bacchds（バッカス）」にも所属してソフトボールにも興じ、スポーツをしてリフレッシュしていた。ちなみに、藤高の「Sekaituru」は、戦前の看板ブランド「世界鶴」から命名され、「世界鶴」は藤高創業者の藤高豊作氏の妻・ツル枝氏の名前から付けられたものである（株式会社藤高 HP）。



Sekaituru のユニフォームを着た軟式野球チームのメンバー

前列右から2番目が豊田一也氏



地元ソフトボール部のバックカス
前列中央の賞状を持っているの
が豊田一也氏

初代タオルマイスター任命

豊田氏は、長年の藤高での功績と四国タオル工業組合（現・今治タオル工業組合）などにおける活動が認められ、2008年に初代タオルマイスターに任命された。タオルマイスター制度設立時に同組合が設けた定義によると、タオルマイスター制度とは、「知識と経験に裏打ちされた最高の技術と技能を身につけ、後進の指導育成と技術・技能の継承に貢献し、併せて地域社会に貢献する資質人格を兼ね備えた技術者を顕彰するとともに、次代を担う若手技術者並びに中級・上級技術者へ模範を示し、技術と技能の継承を進めていくための制度」であり、タオルマイスターに任命される技術者は以下の要件を満たす者である。

- ① 実務経験 20 年以上
- ② 技能検定「職種：織機調整」1 級合格者、もしくは新技能検定（四国タオル工業組合社内技能検定「職種：タオル製造」）1 級合格者
- ③ 職業訓練指導員免許取得者
- ④ 後進を指導育成する事業や会に協力した貢献した実績があ


り、今後も次代を担う技術者への知識・技能の伝達に貢献できる者

⑤ 本人並びに所属する組合員企業の同意が得られること

上記の厳しい要件を満たした技術者の中から、当時は四国タオル工業組合内に設置された今治タオルプロジェクトの「ジャパンプランド人材育成部会」（現在は今治タオル工業組合「ヒューマンリソースワーキンググループ（WG）」）の推薦決議を得たのち、理事会の決定によってタオルマイスターが選出された。そして、今治商工会議所、四国タオル工業組合、今治市から初代タオルマイスターとして以下の4名が正式に認定された。

認定第1号	豊田一也	所属企業	(株)藤高
認定第2号	谷口史郎	所属企業	(株)オリム
認定第3号	山田克弘	所属企業	吉原タオル(株)
認定第4号	阿部洋三	所属企業	(株)橘屋

* 所属企業は任命当時

2008年10月17日、「今治タオルメッセ」（今治市）にて叙任式が開催され、上記4名の技術者は、多くの人たちが見守る中で初代タオルマイスターの称号が与えられた（谷口史郎氏については2018年12月号～2019年3月号を参照）。このとき、朝日新聞（2008年10月18日朝刊）などのマスコミでもニュースとしてとり上げられ、全国的にも話題となった。

また、豊田氏は、初代タオルマイスター就任の少し前の同年2月に職業訓練指導員免許を取得し、広く今治タオル業界のために後進の指導に従事するようになった。（次号につづく）



当時の四国タオル工業組合理事長・藤高豊文氏（左）からタオルマイスターの任命を受ける豊田一也氏（右）

（写真出典：今治工業タオル組合）



叙任式での豊田一也氏

（写真出典：今治工業タオル組合）

